

当麻寺東西両塔の調査

建造物研究室

当麻寺は二上山の東南麓にあって、古道「竹内越」にも近く、古くから開けた土地に伽藍が営まれた。その創立は天武年間と伝えているが、その頃まで遡る建築遺構は残されていない。現在、国宝・重要文化財建造物は東塔、西塔、木堂（曼荼羅堂）、金堂、講堂、薬師堂の6棟で、このうち、建立の経過や変遷について問題が多い東西両塔について調査を行なった。

西塔 壇上積基壇上に建つ木瓦葺きの三間三重塔婆である。基壇上面は内外とも凝灰岩切石敷の土間床で、四方中央間を板扉、脇間を土壁とする。柱は円柱、軸部は地長押、内法長押、頭貫、台輪。組物は三手先組、中備えは初層のみ間斗東、軒は二軒繁垂木である。この塔は明治30年に国宝に指定され、大正2年に解体修理工事が行なわれたが、伏鉢銘によると、建保、慶長、正保、明和の4期に修理が行なわれたことが知られる。

初重では長押・扉口・天井・須弥壇がすべて大正修理時に新材で造り替えられ、柱痕跡によると、床張りとなった時期がある。また、軒廻りでは尾垂木を4cm程外に引出して支輪勾配を緩くし、地隅木を8~17cm程内に引込んで垂木を打替えている。

初重垂木割の現状は中間に9支、脇間に7.5支、出桁まで5.5支を配り、隅柱上で垂木を真に、中柱上と出桁上で手挟みとして、垂木間はそれぞれ異なる。支輪・小天井割りや出桁先端の垂木欠込み痕跡から当初の垂木割を復原すると、1支寸法を中間とほぼ等しく脇間と軒先に配って、隅柱上と出桁上では垂木は真にも、手挟みにもならない。この垂木割の変更にもなって、脇間の支輪割と軒小天井格子割りも変えている。

二重では尾垂木・出桁・隅木は全て新材で、三重では柱・台輪・斗・肘木・垂木以外は全て大正の取替材である。修理前の実測図によると、三重は尾垂木を内に引込んで、立上りの強い支輪に改造されていたが、大正修理に際して、現状のように二重に合わせて勾配の緩い支輪に改めている。また、二・三重では斗や肘木、垂木に後世の補足材があり、当初垂木に数回の打替え痕跡があるなど、中・近世の改造が多く認められる。

柱間割りは初重では中間を脇間（中間の8割）より広くして、二・三重では3間等間とする。垂木割りは初重では前記のように脇間・出桁の配置と無関係に垂木を配り、二・三重では柱上出桁上とも手挟みとして、垂木間をそろえている。

斗栱は初重では出桁下斗栱が平尾垂木、隅尾垂木上とも三斗形式とし、二・三重では隅で一木の連続した肘木を通して。また隅行の一段肘木は、初重は桧材で斗を重ねて二段肘木を受け、二重では斗と一木になった樺材を用い、肘木側面に斗形を矧木している。

斗の大きさは初重では大斗上三斗が上段斗より若干大きい。二重と三重では殆んど差はないが、初重と二重では見付幅で平均3cm程の差がある。間斗は古いのが、二・三重の斗とほぼ同寸で、束に桧の転用古材を用いるなど、初重間斗東は後補の可能性も考えられる。斗栱全体の木

割は初重は二・三重より木太く重厚である。

台輪の隅仕口は初重では台輪留とし、二・三重では三枚組仕口とする。

心柱は古く、細い檜材で、心礎の脇の方に片寄って立っていて、心礎と心柱とは合わない。心礎の中央には直径70.5cmの心柱納穴があり、石で蓋をしている。なお、大正修理の際に心柱頂部から舍利容器・古銭・建保7年及び明和3年の修理記録等の納入品が発見された。

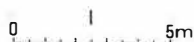
材種は各重とも柱・斗拱に檜材を用い、台輪・頭貫・通肘木・尾垂木・桁などの長材に桧材を用いるが、二・三重では斗や肘木に桧材を混用し、一部の長材に檜材を用いるなど、初重ほど明確な使い分けをしていない。

この塔はすでに指摘されているように、様式上平安時代初期の建立と考えられているが、詳細な検討を要しよう。なお、初重と二・三重では形式技法の差が大きく、二・三重は初重よりも若干遅れたものと思われる。

東塔 二重・三重は柱間2間とする。柱は上部を細め、肘木には筐線りをつけ、下面に胴張りがあり、軒小天井の外の桁と、これを支える斗拱を隅で留に納めるなど、奈良時代の技法をもっている。隅出桁下肘木は西塔の二・三重と同様に、隅で一本の長い肘木を通して、これは中世の改造と考えられる。また、垂木は角垂木で各重とも中世材、明治材に混じって当初材を残すが、三重の地垂木は少なくとも2回の打替えが認められるほか、三重では軸部、斗拱、軒廻りとも中世に大改造を受けている。

各部の技法をみると、東塔は奈良時代の末期に属するものと思われる。復原についてなお問題を多く含み、引続き補足調査を行なう予定である。

(岡田 英男・宮本長二郎)



現状断面図 左西塔 右東塔

初重斗拱詳細 上東塔 下西塔